

にする必要があります。中教審、臨教審、教課審など諸種の答申では、前者は科学技術の進歩、産業構造の変化、情報化、国際化、高齢化、家族構造の変化などにとらえ、後者は、思考力、判断力、創造力、情報処理（選択・構成）能力、表現力、自己教育力、国際理解の精神などとしています。社会科では、現実の社会的事象を直接の学習対象にしています。したがって、これらの変化に関する内容は、社会科の内容と深くかかわっています。各学校・学年段階で、具体的に教育内容としてそれらをどのように取り入れるかは、社会科教育の重要な課題であります。能力は、それらの教育内容の根幹をなすものです。それぞれの教育内容のどこで、どのような能力を育成するか、具体的に構築することこそ求められます。

(2)では、集団指導（学習）の場である学校における社会科の学習指導において、具体的にどのように個を生かす（個別化）教育を実現するかということです。これからの教育にはこのことが特に求められています。もちろん個別化の必要性は教育の基本であり、教育の機会均等とか公教育という面でも求められてきました。ところがとするとこの考え方に立つ個別化は、結果の個別化つまりそれだと差別になりかねないので学習の結果をみんな同じように揃えるという考え方に陥りがちでした。これからの教育に求められるものは、子どもの内在的なものの個別化です。それが今なぜ必要か。新たな創造をしていかなければならない時代の教育は、画一的な一斉授業はふさわしくない。また、変化の激しい社会に生きる子どもにとって社会的事象に対する見方や考え方を身につけたり、学習意欲を喚起させたり、そして自らの生き方を考えたりする力は不可欠です。それは一人一人を生かし、或いは自らが生きる教育、個別化教育によって培われてくる力、創造的で主体的に考え判断できる力、そういった学力が求められるわけです。それを社会科教育においてどのように実現するか、個人差が大きく、社会科嫌い（ばなれ）や社会科学習における「つまずき」が指摘されている今日、社会科教育のリザーレクションを目指した研究と実践こそ、これからの社会科教育に特に求められることと考えます。

## 高校社会科の科目構成について

### — 現行教育課程における選択制の可能性と問題点 —

橋 本 克 己<sup>\*</sup>

#### 1. はじめに

現行教育課程が実施され、10年近くが経ようとしている。多くの学校では、教員構成と旧課程系統学習に生かされていた科目間の相互補完性を尊重する観点から、安易な選択制を導入せず、

\* 都立白鷗高等学校

「現代社会」を何らかの形で加えながらも社会科の全体像を見渡せるような独自のカリキュラムを編成してきた。しかし、共通一次試験からの「現社はずし」や、それにとまなう私大・国公立二次試験の地歴三科目偏重が明確となるに及び、カリキュラムの大幅変更を余儀なくされた学校も少なくない。進学希望者が多数を占める学校ほど、混乱は大きかった。

## 2. 選択制の利点

入学試験の「戦果」を考えると、入試に「必要ないもの」は、極力「やらせたくない」「やりたくない」という声が大きくなっていく。理系に進学する生徒が、卒業直前まで社会科の授業に追い回されることへの同情的な意見、2年次から1科目だけをじっくりと、やる気のある生徒だけに親身に指導したいという意見が教師の側に出て来た。私の知るところ、カリキュラム改訂に動いた学校は、これらのことを背景としているようだ。その観点からすると選択制には次のような利点を挙げるができる。

- (1) 2年次において受験科目の履修をするので、学校の授業をベースとした入試対策（しかも早期の）がとれる。とくに難度上昇の著しい私大文系入試に有利である。
- (2) 自分の得意な、または「好きな」科目のみ履修できるので、授業への参加意欲が向上する。
- (3) 旧課程カリキュラムでは、比較的3年次に大きかった社会科全員必修の「縛り」がなくなった。したがって、文系・理系のはっきりした色彩のある授業構成ができるようになった。
- (4) カリキュラム編成全体の立場から見ると、全員必修の「ワク」が総じて減少したことにより、増加単位分などの「自由選択」を拡大することができ、個々のニーズに応じた授業構成が組めるようになった。

## 3. 選択制の問題点

一方、次のような重大な問題も生じてくる。

- (1) 生徒は大学入試問題の難易度に敏感であるため、とくに共通一次試験の平均点が高い科目のみを履修したが、必要ないもの以外は拒否する。文系志望生徒の「世界史」集中、理系志望生徒の地理集中という傾向が生じてくる。
- (2) 国公立二次・私大入試で用意されている科目に集中するので、「政治・経済」、「倫理」の履修者は極端に減少する。また、「現代社会」は「必要ない」ので、1年次の必修であるにもかかわらず、学習意欲がわかない。
- (3) 授業持ち時間のあり方に大きな変動が生じるため、社会科内部の教員構成のあり方を見直さなければならない。しかも、地歴科目の担当者の多くは専門性を主張し、「現代社会」担当を拒否

する傾向にある。

- (4) その結果、社会科内部で、いわば「囲い込み」と言えるような生徒の奪い合いが激化する。「じっくりと教える」という大義名分のもとに、教科書を2年次では完結させず、3年次における自由選択を履修しなければならないような授業展開を行なう。教員は持ち時間を確保できるが、生徒は他の科目を選択する機会を失ってしまうことになる。
- (5) 受験産業による「文系は『世界史』が有利」「理系は『地理』」という情報提供が、科目一点集中傾向をおおるので、相互補完性の利点は消滅し、社会の有為な形成者として必要な公民的資質の育成を広い視野から行なっていくことは不可能となる。
- (6) 全体の中での社会科の総授業時数は、かなり減少し、近い将来教員の過員問題も発生すると思われる。そうなれば、学校教育に果たしてきた社会科の役割に対する評価は薄れ、教科の立場は弱いものとなってゆく。

### 3. 考察と提言

以上のように、選択制を現在の形態で継続させることは、高校教育のあり方に、大きな歪みを生じさせることになる。高校教育が準義務教育化した今日、選択制の大幅導入や、各地に建設されつつある単位制高等学校などは、多様化・個別化への有効な対応方法であるという指摘も多い。しかし、多様化・個別化という本来の意味は、もっと違うところにあるような気がする。とくに全日制普通科の場合について言えば、一般教養を身につけるという原点に立ち返って見直さなければならないことは多い。形式を手直しして行くだけでは根本的解決にはつながらない。ところが、昨年発表された新しい教育課程の概要は、残念ながら前向きなものとは言い難い。「戦後40年の教育理念の象徴的存在であった社会科を解体するとは……」という感情的な反発をするつもりは全くないが、その人たちが本当に社会科教育を守って行こうとする決意を持っているならば、ぜひ次のような観点で考えてみてほしいと思う。

- (1) 「世界史離れ」という現象は、本当に存在したのだろうか。これを主張する人々は、教科書採択数などを例に出して、その深刻さを訴え続けた。そして、ついに必修化を実現させた。しかし、履修している生徒層の問題には全く触れていない。多くの単位数を費さなければ現代にまで話題のやってくる「世界史」の履修に耐えぬき、受験科目として選定しうる者は、我々の見るところ「出来る生徒」に多い。一方、それについて行けねば、「中学でやって馴染みもあるから」と、「日本史」へ流れ込んで行く。ところが、入試問題の難度から、こうした生徒は目的を達成できないことが多い。「世界史離れ」どころか、水面下の、しかも奥深いところで確実に「日本史離れ」が進行している。国際化社会だから「世界史」を、という主張にも一理はあるが、

数年後、多方面に活躍する人材の中には「日本史」を履修していない者が多数を占めるに至るだろう。日本史・日本文化を語れないリーダーたちに、国際社会を相手にすることを期待できるだろうか。

- (2) なぜ安易に「現代社会」を葬ってしまうのだろうか。「現代社会」は、社会科のすべての教員が担当できるところに、その理想があったと思う。専門性にこだわり、自己の教材精選能力や教授方法の見直しに縁遠かった社会科の教員にとって、同じ土俵に上り、自分を相対化し、反省することの出来る唯一の科目ではなかったか。
- (3) 故黒羽清隆教授は「社会科をつくっていく努力の中でこそ、歴史とか地理とか、政治とかいう個々のエレメンタルな内容が生きている」と指摘した。社会科が解体されると嘆く以前に、なぜ社会科にかかわった全ての人間が、こうした観点に立てなかったのだろうかと考えてみる必要がある。専門性にこだわり、時の有力者と結んで自分の科目への専一を守ろうとしたことの繰り返しに、社会科の弱点があったとは考えられないか。

社会科教育は、今まで熱心に「～についての歴史的考察」とか「～の教材化について」という問題について研究を重ねてきたが、大切な教授方略の改善については、ほとんど他人任せになっていた。今後も、しばらくそうであるかも知れない。だが、時は確実に流れ、社会を生徒を変化させている。それを選択制や一部科目の必修化という形式論で解決し続けようとする以上、社会科教員の間には燻っていた相互不信は一層表面化するであろう。そうさせないためにも、今こそ、すべての力を注いで冷静な反省をしておかなければならないと思う。